



800年前の「熊野詣」^{もうで}



世界遺産を構成する三つの霊場の一つ「熊野三山」は、平安時代になると、人々を救う力が最も強い神や仏が宿るところとされ、都に住む人々が切実な願いを抱いて訪れるようになりました。

特に、上皇が本宮、新宮、那智の熊野三山を巡拝する「熊野御幸」は、最も規模が大きいうえ、鎌倉時代にかけての一時期、毎年のように行われたため、「熊野詣」が社会風習化する原因となりました。

そうした御幸では、お供の人々も多いため、中には出発してから都に戻るまでの記録を書きのこした人もあり、貴重な資料となっています。

その一つ、国宝の『熊野御幸記』は、鎌倉時代の建仁元年（1201）、後鳥羽上皇の熊野御幸に和歌の指導役として従った藤原定家（当時38才）の日記です。

それをもとに、800年前の「熊野詣」の様子を、探ってみましょう。

① 日程は？

10月（旧暦）の5日に京都を出発、16日から19日にかけて本宮から新宮を経て那智へと熊野三山を巡拝し、21日本宮から帰途につき、26日に京都に戻りました。往きに12日、帰りはその半分の6日かかっていますが、行きは途中で行事が多いうえ、徒歩が原則とされたのに対し、帰途は馬に乗れたためです。

② 道順は？

京都から舟で淀川を下り窪津（大坂）で上陸、紀伊半島西岸伝いに南下して、田辺から東へ進み、紀伊山地中央部の熊野本宮大社に参詣します。本宮からは熊野川を小舟で下り、河口部にある熊野速玉大社に参詣。その後、海岸伝いに南下し、浜の宮から内陸部へ転じて、那智山中腹にある熊野那智大社に参詣しました。片道で約300kmもある長い道のりです。

「紀伊路」あるいは単に「熊野道」と呼ばれたこの道の途中、窪津から那智山までは、熊野の神々の子神を祀る「九十九王子社」が点々とあり、そこで参拝を重ねながら熊野を目指しました。

那智で「熊野詣」の目的を達成した人々は、そのまま来た道を折り返して京都に帰るのがふつうですが、建仁元年（1201）の御幸では那智山から北へ険しい山越えをして本宮に戻っています。

③ 服装は？

「熊野詣」は観光旅行ではなく、険しい山道を歩きながら、生まれてからずっと心身にこびりついた汚れを取り除き、神仏に近づくための修行でした。従って、道中は「山伏」のような白装束に身をかため、熊野三山などでの公式行事の時には、地位と場面に応じた装束に着替えました。

④ 食べ物は？

出発する前から京都に帰る日まで、肉や魚などの「なまぐさいもの」は厳禁でした。メニューは、米や豆、野菜を中心とした質素な「精進料理」で、一行二、三百人分の材料を都から持って行くのは大変なので、役人や沿道の荘園に前もって連絡して準備させていました。

⑤ 泊まる場所は？

当時はまだ旅館やホテルはありませんでしたので、主要な王子社の近くに設けられた宿舎に泊まりました。しかし、宿舎といいながら設備が整ったところはほとんどなく、多くは板で囲い屋根をかけただけの、粗末で狭苦しい小屋でした。

また海辺では漁師の網小屋、深い山中では雨露を防ぐだけのテントのようなものもあり、都での優雅な生活とは比べものにならない苦痛を強いられました。

⑥ 道中ですることは？

修験道の山伏でも位の高い人が「先達」として一行を案内し指示を出しますので、それに従って行動し、行事を重ねました。

まず、途中の王子社では、「奉幣」すなわち神様に差し上げる物をあらわす「御幣」を捧げて祈るとともに、「御経供養」といって神様のためにお経を読むのがきまりでした。特に、藤白王子、滝尻王子、発心門王子などの重要な王子では、「奉幣」や「御経供養」の後に、神楽や相撲、和歌を詠む会が盛大に催されました。

しかし、「熊野詣」の基本はあくまで修行と祈願ですので、険しい山道を歩き通すだけでも大変ですが、川や海の水を浴びて心身を浄める「水垢離」や「塩垢離」を決められた通りにせねばなりませんでした。

また、夜中に松明を頼りに最も険しい山をよじ登るような日程も組み込まれていました。

⑦ 熊野三山ですることは？

熊野三山は、当時すでに日本第一の霊場となっていました。従って、立派な社殿や堂塔をはじめ、参拝者を泊める施設や、世話をする人々の住まいなども建ち並び、「熊野詣」の社会風習化に応じた受け入れ態勢が整っていました。また、参拝や様々な行事もスムーズに進められました。

その内容は、基本的には主要な王子社での行事を一段と盛大にしたようなものですが、横一列に並んだ熊野十二所権現のうち、中心となる三所権現から始めて、中四社、下四社まで、順次「奉幣」と「御経供養」を重ねました。また、こうした上皇主催の公式参拝に参列するのは別に、それぞれが私的な参拝もしました。

⑧ 定家の感想は？

「熊野詣」は都や全国の人々のあこがれでした。しかし、その道中は、今日の熊野古道歩きとは比べものにならないほど厳しいもので、途中で風邪をひき、足をくじいた定家は、最後まで無事に過ごせるかどうか、真剣に心配しています。それだけに、熊野本宮に着いたときのよろこびは大きく、神前で涙を流しました。

また、鎌倉時代を代表する歌人にふさわしく、美しい風景や、木々の様子が都と違うことなどを、細かく書き残しています。



熊野本宮大社